

イエスは、金も、力も、地位も、健康にも恵まれず、貧乏に打ちひしがれて、望みもなく、頼るものもなくて、神頼み以外には残された道もなく、吐くため息も弱々しげな人びとこそ、〈しあわせ〉だと言います。私たちの〈常識〉とは正反対なことばです。なぜなのでしょう？ 今回はこのことについて考えていきましょう。

『聖書』における《富》・《貧しさ》とは

私たちが生活していくためには〈お金〉は必要不可欠です。現代社会は「金さえあれば、ほとんど何でも手に入る ……」と考えている人たちが大勢います。そこまでは考えなくても、ある程度お金がなければ生きていけないのが人間の生活です。

しかしイエスは、「金も、…… もなく、弱々しげな人びとこそ〈しあわせ〉だ」と言っています。そこで「お金（財産）」について、『聖書』はどのような考え方なのかをみていきましょう。これについては、土井健司氏の『キリスト教は戦争好きか』（聖書と歴史の観点からキリスト教を根源的に捉え直す素晴らしい本です！）の第3章『富・貧困とキリスト教』を参考にしながら話を進めていきたいと思えます。

土井氏は、日本の多くの人たちはキリスト教に対して『「精神性を重んじ、物質的なものを軽視する」という印象がある』ようだと書いています。そこで『旧約聖書』の『創世記』第11章10節から25章11節にその人物像が書かれているアブラハムという人を取り上げています。

彼は、「聴従の人」「平和主義者」「とりなす義人」など、人間の模範となるような人物で、神から祝福された一番初めの族長というイメージがあります。第22章の「イサクの犠牲」の話は、アブラハムが父としての人間的・倫理的な感情を優先するのか、それとも、これまで同様に神の絶対的命への聴従をとるのかという、興味深いものです。「おまえだったら、どうする!？」と迫ってきます。簡単にご紹介します。

.....

【第22章の要約】 アブラハム 100歳、妻のサラ 90歳の時、神の約束が果たされて息子イサク（「笑い」の意）が誕生。ある時、神がアブラハムを試される。神は「あなたの愛する息子イサクを（中略）焼き尽くす献げ物としてささげなさい」と告げる。彼は翌朝、指定されたモリヤの地に息子を連れていく。「焼き尽くす献げ物にする小羊はどこに？」と尋ねるイサクに「子羊はきっと神が備えてくださる」とアブラハムは答える。イサクを縛って祭壇の薪の上に乗せ、刃物で息子を屠ろうとしたその時、天からの主の使いが「アブラハム、…… 手を下すな。（中略）あなたが神を畏れる者であることが、今、わかったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることをご惜しまなかつた。（中略）あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。……」（第1節～17節）

.....

私が初めてこの話を読んだとき、「神さまって、何てことをするんだろう？ なにも、一生けんめい信仰を守り通し、子供を授かることなど考えられない歳にもかかわらずお恵みになった息子を献げ物としてささげろなんて、そりゃないだろ。」と思いました。み

なさんも同じではありませんか？（このことについて書き始めると、『塾』1回分になってしまいそうなので、今回は省略いたします。）

《神の祝福》としての〈財産〉

その後、神の約束は守られ『主がわたし（僕くしもべ）の主人（アブラハム）を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。』（第24章35節）とあります。すなわち『創世記』では、〈財産〉とは〈神の祝福として与えられるもの〉という考え方があります。

また『申命記』28章～30章では、いろいろな財産は律法に従い、**律法を守ることで与えられる神の祝福**であり、これに背くと財産は没収されるということが語られています。『アブラハムといった族長たちの時代、今から3000年以上前であれば、貧困は生命の危険に直結します。日々の生活に必要な物資、財産や富は決して悪いものではなく、生活に役立つ良いもの、**神から恵み与えられたものと理解**』されたのです。

さらに『ヨブ記』（これは「財産」よりも、「神は愛のはずなのに、なぜこの世に悪が存在するのか、という「神議論」を扱うときによく読まれる書物なので、後日ご紹介する機会があると思います）の冒頭には、

『ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で神を畏れ、悪を避けて生きていた。七人の息子と三人の娘を持ち、羊7千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も多かった。彼は東の国一番の富豪であった。』（1章1節～3節）とあります。ヨブが裕福なのは彼の敬虔さゆえであり、敬虔で正しく生きていれば、富が得られるということになります。ただし、不正な手段で財産を得ようとすることは批判され、罰せられます。

《貧しい人》とは『犠牲を強いられながらも敬虔な人』

では、財産が神の祝福であるなら、貧困は〈神の罰〉なのではないでしょうか？ 旧約聖書の『箴言』（道徳上の格言や教訓などが集められた書）に、

『貧乏でも、完全な道を歩む人は、唇の曲がった愚か者よりも幸いだ』（第19章1節）、『金持ちと貧乏な人が出会う。主はそのどちらもつくられた。』（第22章2節）と記されています。

貧困は決して神に嫌われたものではないのです。『それどころか、**貧者こそが神の加護を受けるに値するとされる**』と、土井氏は『詩編』37編14節～16節を引用します。

『主に逆らう者は剣（つるぎ）を抜き、弓を引き絞り、貧しい人、乏しい人を倒そうとし、まっすぐ歩む人を屠ろうとするが、その剣はかえって自分の胸を貫き、弓は折れるであろう。主に従う人が持っている物は僅かでも、主に逆らう者、権力ある者の富にまさる。』

つまり『貧しい人』とは、『単純に経済的な次元で語られているわけではな』く、『正しいが故に、誰かの不正の犠牲になる人、やさしいが故に詐欺や強奪などの被害に遭う人……。犠牲を強いられながらも神を信じる敬虔な人を指すのです』。〈貧しさ〉ということばには、宗教的・社会的な意味合いが含まれています。

《貧しい人々がもつ富》

ジャン・バニエ Jean Vanier という人がいます。数多くの著書があり、その1冊1冊に〈小さき者〉への愛と感謝があふれています。彼は1964年知的ハンディキャップを負った2人の子どもと出会い、彼らを引き取って『ラルシュ（箱舟）共同体』と名づけた共同生活を始めます。現在、世界各地に約150か所ほどの共同体が設立されています。

『貧しい人々は、私たちが富ませることができます。飢えた人々は、私たちが満たすことができます。傷ついた人々は、私たちの心の破れを繕い、私たちが癒すことができます』という文章があります。貧しい人々が私たちが富ませ、満たし、傷ついた人々が私たちが癒す。これもイエスのことば同様、私たちの「常識」を覆します。

彼はルシアという歩くことができず、体は硬直し、麻痺がある青年と生活しました。母親と30年間暮らしていましたが、母が病気になり病院に入ってしまった。ルシアは孤独の世界へ放り込まれ、叫ぶことが多くなり、バニエ師のところに来ました。バニエ師はルシアの苦悩、悲しみの深さ、孤独を前に、まったく無力な自分を思い知らされます。バニエ師は『よく子どもをたたく親がいますが、それは、たたく側の心の泉が干からびているからです。私も自分に、こうした暗い世界があることを認めざるを得ませんでした』。バニエ師自身、「自分がいかに貧しいか」を自覚したのです。そして『この自分の中の闇や破れを認めるとき、光が差し込んでくること』も知ったのです。彼は大学で哲学と神学を学び、カナダ・トロント大学で教えていたほどの人です。その人が重いハンディキャップがある青年に、「何もできない自分」を突きつけられたのです。

そして言います。『私たちは、自分のもっている傷を受け入れることができ初めて、傷ついている他人を思いやることができる』と。そして、強くなる必要はないし、傷つけないための壁を作ることもない。むしろ『弱くて、もろい面をもった自分、あるがままの自分でよいのだ。なぜなら、私の弱さは他の人の賜物による助けが必要なことを教え、他の人の弱さは、私の賜物による助けが必要なことを教えるからだ』と続けます。

私たち一人ひとりが〈共同体〉という一つのからだを構成していること。そこでは、さまざまな賜物をもった人間が集まって互いに助け合っていることを再認識したのです。つまり、『私たちはいわば、共同体の中で生きるものとして召されている』と言います。

前回『ミツは、逆にその人たち（ハンセン病の患者さんたち、修道女）から〈あるもの〉を贈られたのです』と書きました。それは、バニエ師が重いハンディを負った多くの人たちから贈られたものと同じだと思います。『この別世界から…逃げていきたい』とまで思った場所へ、再び「戻ろう」と決めたミツ。これからのミツの人生にとって、病棟の《みんな》がもつ〈賜物〉が必要であり、〈みんな〉も《ミツ》がもつ〈賜物〉が生きていくうえで不可欠だったのです。

今回は、〈賜物〉についての補足を少し書いて、『わたしが・棄てた・女』のクライマックス部分に入っていこうと思います。では、次回まで。

【引用・参考にした書籍】

- ・土井健司 『キリスト教は戦争好きか』（朝日新聞出版、2012）
- ・ジャン バニエ 『小さき者からの光』（あめんどう、2001）
- ・日本聖書協会 『聖書 新共同訳』